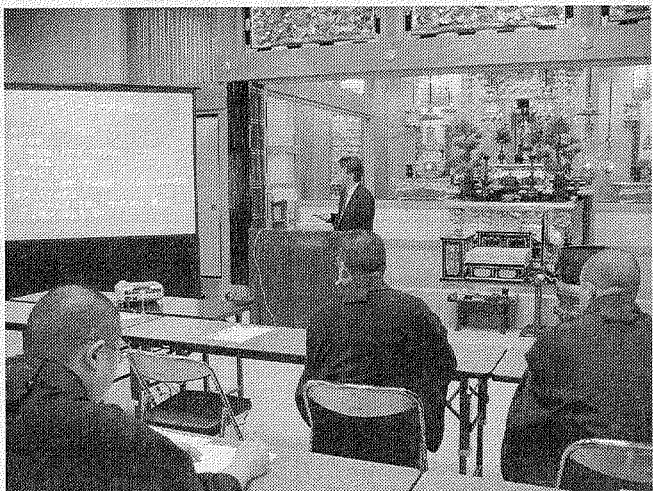


## 宗教者参加で医療にも幅

函館 僧侶向けにホスピス講演会



は「機関や場所ではなく、理念である」とし、キリスト教が背景にあって肉体的、精神的に末期がん患者を支えるなどと概略を紹介。

国内で仏教を背景とした同様の施設「ビハール(VIHARA、安らぎの場所などの意)」開設の動きが二十年前から始まり、現在、首都圏など数力所で運営されていることを挙げた。

ホスピスでは、牧師に入所者との直接対話で不安や苦痛を緩和するという重要な役割があり、仏教と文化的にかかわりが深い日本では僧侶との対話が必要となる可能性などを示した。

また「一人の患者を支えるのにさまざまな人で構成する『チーム医療』には、宗教者の参加でより幅が広がる」と呼びかけた。

光慶寺の北畠尊住職(たかし)は「仏教の布教者である私たちが、末期がんの患者さんを支えるための力になれる、と理解できました」と話していた。

(川崎裕幸)

若手の僧侶たちに「ホスピスの心」を紹介し、仏教の可能性など示した福徳院長(中央奥)

「函館市の場町の函館おしま病院の福徳雅章院長による、僧侶向けの講演会「ホスピスの心」がこのほど、同町の光慶寺で開かれ、「仏教から見たホスピス」について考えた。

ホスピスは、末期がん患者らの肉体的苦痛、死への不安による精神的な苦しみなどを、患者の家族を含めて総合的に支える施設。ホスピスは中世の欧州で、修道所が病人らを救済した経緯などから、キリスト教が背景となっている。

函館おしま病院は、昨年四月にホスピス病棟(終末期緩和ケア病棟)二十床を開設。月一回、一般向けの「ホスピス勉強会」も開いているが、今回は道南の若手僧侶でつくる「函館仏教青年会」の依頼で講演会が実現。福徳院長によると、僧侶対象の講演は初めてという。

福徳さんは、ホスピス